

子どもの「手の働き」に関する研究（第5報）

教師の認識の実態（教師の生活経験による分析）

福山市立女短大 ○加納三千子 山本百合子 金田すみれ 西川龍也 正保正恵

【目的】 本報では、教師の生活経験が子どもの「手の働き」のとらえ方や生活技術観にどのように関わっているかを分析した。

【方法】 調査対象者及び調査内容、時期は第3報に同じである。ここでは、教師の生活経験として、子ども時代の手伝いや遊びの数を分析の軸とした。また、手伝いを労作によりタイプ化して分析を行った。

【結果】 1. 年齢により子ども時代の遊びに特徴がみられた。

2. 手伝いの状況を年齢別に見ると、年齢の高いもの程良く手伝っていたもの（農作業、水くみ、薪割りなど）と、30代が最も少なく、低年齢層と高年齢のものがよく手伝っていたもの（食事の仕度、掃除、選択、食事の後かたづけなど）があった。

3. 手伝いの回答個数の多いものほど、子どもの行動に対する問題意識が強くなっていた。

4. 手伝いの回答個数の多いものほど生活技術を必要だと考えたものが多く、両手の共働性と日常生活及び学習態度との関連を認めるものも多くなっていた。また、これらの生活技術は教育上②情緒の安定のためや③身体の発達のために必要だと考えるものが多くなっていた。

5. 手伝いのタイプ別にみると、子どもの行動に対する問題意識は軽労作タイプの方が強くなっていた。一方、重労作タイプの方が生活技術を②情緒の安定のためや④暮らしの潤いのために必要と考えるものが多いなど、手伝いの労作タイプによる特徴がみられた。